[COMMUNION]
WEB:http://www.nskk.org/tokyo/index.html
E-mail:comm.tko@nskk.org
PHONE:03-3433-0987
FAX:03-3433-8678
Diocese Office

コミュニオン

東京教区時報［クリスマス号］

第２０号
（通巻１２５５号）
2014 年 12 月２１日
編集：広報委員会
委員長：渡辺康弘
日本聖公会東京教区
港区芝公園 3-6-18

《クリスマスメッセージ》

クリスマスおめでとう

司祭　テモテ　小笠原　忍

クリスマスには、『おめでとう』の挨拶が交わされ、喜びに満たされますが、ひとたび平常の生活をみてみますと、人の力ではどうにもならない事が多く、あとは神に託する以外には無いと、神の介入を願うことの多い私たちです。

このクリスマスの出来事、「キリストが人間としてお生まれになった」のは、神の生命を受けて全人類全体を一つに和解させるための神のご計画でした。神による救いの状態です。

私たちの誕生日には、「誕生日おめでとう」の挨拶が贈られ、生まれてから、これまで生きてきた年数を意識し、また、新たな一年の始めと鼓舞される時でもあります。

私たちに与えられている「生」の意味は、日常の生活の中で、より良い社会、より良い人間関係を築くことにあると云えましょう。それはまさに、主イエスによりもたらされようとした救いの状態に繋がるものです。しかし、時間的制約の中に生きる私たちは、誰しもが、その実現のために、限られた時間を超え、死で終わらせたくないと願うのではないでしょうか。

キリストの誕生は、過去の一つの事実ではなく、死を超えたいと願う私たちが、いつでも、誰でも、このキリストに、そして今、天におられるキリストと、全く結ばれることなのです。永遠の命を授かるために。

元々、人は神によって造られました。そのアダムとエバに代表される「神の子」が、自らの意思によって反逆してしまい、のちに再び「神の子」となる、新たな状態の復帰を願うようになりました。それを可能にする神の側の一方的な人間の救済の行為、これこそが「救い主の誕生」という、地上での具現的な出来事であり、それは古くから天使や多くの預言者たちを通して告知されていた「処女マリアから生まれる男の子イエスの誕生」による予言の成就でした。つまり、神は、救いを必要とする人々、メシアを待ち望む人々の間に、主イエスを人の姿をとって誕生させることにより、救い主を現実のものとし、身近に顕してくださったのです。

古い話になります。かつて、ベトナム戦争の折、「クリスマス休戦」が提唱され、戦っていた両国が、この時だけ銃を手にすること無く、休戦の約束が守られ、一時的ではありましたが、不戦が事実となりました。しかし、その約束は時間と共に空しく破棄されてしまいました。それが、国と国、つまり人間同士の間だけに取り交わされた「クリスマス」ということだけで起こった束の間の平和だったからです。

「クリスマスおめでとう」と祝辞を交わす時、単に喜びを分かち合うだけでなく、私たちに託されている「神の救いのみ業」の働きの一端を具体的にどのように自分は担い、少しでも完成に近づくための力になっているかどうか、見直す必要が求められています。

来るべき今年の「クリスマス」、救い主への捧げものとして、日々の生活の中から、神に差し出せる有形・無形の贈り物を用意したいものです。

信徒奉事者講座
み言葉の礼拝を受講して

講師の吉田雅人司祭（ウイリアムス神学館館長）が用意してくださった講座資料は、著作権は主張するつもりはありませんから、自由にコピーしてお使い下さいとの事でした。

ここでは、強い印象を受けた事柄について述べることにします。

受講のきっかけ

サーバー奉仕を始めた頃、ある司祭に信徒奉事者を目指してくださいと言われたのですが、私の心の中には信徒奉事者はヒエラルキーの一部にあって権威主義的なにおいがして、私の目指すものではないと感じていました。それでも気にはなっていたのでしょう、その後「信徒奉事者とは」という講座に参加し、初期教会の時代からあった奉仕職と知り、前向きにとらえられるようになりました。

心に響いたキーワード

・祝いの礼拝

日曜日（主日）に捧げる「み言葉の礼拝」は、毎日の定時の礼拝（オフィス）の一つとして守るというより、お祝いのイメージを持ってみ言葉を聞くことを中心とした教会共同体の祝祭的な礼拝なのだと。毎日の義務としての礼拝ではなく、祝祭、フェスティバルであり、聖餐にあずかることは、イエスと一つになることなのだから、もっとにこにこと喜んでいいでしょう。

幼子の喜びの笑顔にならおう。私が所属する教会で、母親の胎内にいる頃から主日の礼拝を守っていた男の子が、一人歩きができるようになり、祝福を受ける時、また受けた後のなんとも嬉しそうな顔が思いだされる。こうありたいものだが、小学生になった今、彼は大人にならって？神妙な顔をして祝福を受けている。

・大和言葉の使用

歴史をひもとくと、英国あるいは米国聖公会祈祷書についての初期の日本語への翻訳作業の中で、宣教師たちは、出来るだけ易しい言葉に訳したかったようだが、彼らを補助する日本人の信徒　―当時は日本人の司祭はいなかったと思われる―　は出自が武士階級で、漢籍の素養が深かったり、また中国語の祈祷書も参考にしたため、格調高い祈祷書が作成された。たとえば朝の祈りは、早祷となった。今回のみ言葉の礼拝を作成するにあたっては、漢語や熟語を使わずに和語にしたかった。

・ともに・・・・

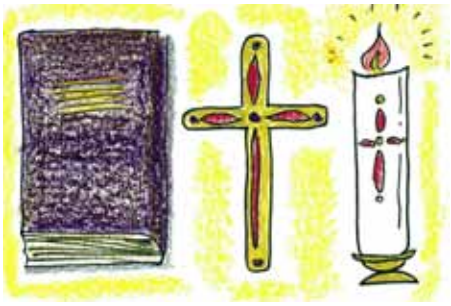
「ともに」を大切にしようということが主眼です。朝夕の礼拝は個人でも共同でも行うけれども、「み言葉の礼拝」は性格として、ともに集い、主日における聖書のみ言葉をともに聞き、ともに祈り、そして主とともに行くことを通した、共同体の祝いである。

・象徴的行為

２００３年の聖公会国際礼拝協議会（リボンカレッジ、オックスフォード）での毎朝の礼拝で、

司式者　初めに、世界が闇であった
とき、神は言われた。「光あれ」
会　衆　そして、光があった

沈黙の中、会衆席の真ん中の通路から、太いローソク（復活のローソクほどではない）を持って、聖卓の右端にそっと置き、皆が注目する中、席にもどる。



司式者　初めに、静けさの中で、言は神
とともにあった
会　衆　言は、神であった

大きな聖書をささげ持って、聖卓の左端にそっと置き、席にもどる。

司式者　神は、その独り子を世にお遣わ
しになった
会　衆　その方によって、わたしたちが
生きるようになるためである

大きめの十字架を中央にそっと置き、席にもどる。

この世の闇を照らす光であるイエスを中心にして、そのみ言葉を聴いて十字架の贖いを感謝するという思いを込めた礼拝が始められた。

この所作は、使用上の一般指針に書かれている。司式をイメージするときの選択肢の一つと考える。

・ともに聞く、聞いてもらう

み言葉の礼拝の中心的部分である聖書朗読で気をつけたいこととして、（1）会衆席の最後尾の方に、み言葉が届くように、句読点はしっかり止めて、ていねいに読む。（2）個人の聖書解釈にならないように、感情を込め過ぎないように、淡々と読む。

（広報委員　前島　惠）

下町教会グループ研修会

牧師不在時の礼拝について

9月28日、葛飾茨十字教会において、下町教会グループの研修会が開かれた。テーマは「牧師不在時の礼拝について」で、これから確実に増えていく信徒による礼拝を、私たちがどのように受け止めたらよいのか、香山洋人司祭と佐々木道人司祭のお2人からお話を伺い、その後、参加者約40名が3つのグループに分かれ、それぞれの思いを語り合った。

まず、香山司祭は「司祭が足りないという状況を過渡期的なものではなく、リアルな現実として受け止めなければならない」とし、「たとえば牧師がいない時に初めての方が来て『ごめんなさい、今日は牧師がいないので、信徒だけでこぢんまりとやっています』と言うのではなく、常に自分たちが出来る最善の礼拝をそこで行うべき。ただ、最善の礼拝が聖餐式というのであれば、今すぐにでも、信徒の誰かが神学校に行き司祭になるしかない。それが出来ないのであれば、発想の転換をして聖餐式ではなくても、賛美、感謝の祈りと共に神の恵みを受け取り、それを分かち合うことが出来るのだから、もっと前向きに信徒の礼拝をとらえていくしかない」と語った。

また佐々木司祭は、祭司職について「私たちは洗礼時に祈祷書で、『ともにキリストの祭司職にあずかる者』とされた。祭司職というのは大きく捉えると『神という大きな平安と人々とを繋ぐ仕事』であり、これは普段の私たちが愛を持って人と接する時、意図せずに誰もがしていること」と語り「その意味で私たちは全員『祭司職にあずかる者』であり、自信を持って神の言葉を伝えていく使命がある。以前、聖路加のチャプレンをしていた時、月のうち1回は信徒に語ってもらっていたが、その人の人生と聖書の触れ合いの話は素晴らしいものだった。そのような経験的な意味においても、信徒がみ言葉を語ることは大切であり、そのための学びの場が必要」と語った。

両司祭の話は、非常に示唆に富むものであり、その後のグループの話し合いも前向きな意見が活発に出された。

私たちは今、聖餐式が毎週出来ないという現実をマイナスと捉えるのではなく、信徒が行う礼拝を、信徒の自覚と成長、そしてより宣教的な礼拝としてプラスに変えることが求められているのではないだろうか。

（広報委員会）

マルコ福澤道夫司祭を偲んで

司祭　佐々木道人

先生の略歴を拝見すると、チャプレン時代が長いことに気付く。1958~60北関東教区学生センターの副チャプレン2年間。そのあと英国のチェスター教区オルバン教会副牧師を経て1962~71新座に移転した立教高校のチャプレン9年間。1971~77立教中学のチャプレン6年間。その後諸教会の勤務を経て、立教女学院チャプレン、1986~98、12年間。1999年定年後葛飾学園チャプレン~2012年12年間と40年を超えるキャリア。そこでチャプレンという切り口から先生を偲んでみたい。

ちなみに先生と出会ったのは私が高校生の50年前のこと。当時私は夏の暑い昼休みに涼しいチャペルの長椅子で寝ていて「チャペルで昼寝をしているやつがいる」と説教で叱られたのを覚えている。その私が20数年後マーガレット教会に伝道師として派遣され、先生と再会した時、両手で抱き留め喜んでくださった。

また私が立教女学院のチャプレンだった時、葛飾学園に用事で行ったら、後ろで可愛い声で「チャプレーン！」と呼びかけられ、振り返えると、保育園児が福澤先生に手を振っていた。その時の先生は、孫と遊ぶおじいちゃんのようにニコニコしておられ、定年後良い時を持たれているなと思った。その光景を見て思い出したのは、江戸の禅僧、大愚・良寛の歌。

「この里に、手まりつきつつ子どもらと、遊ぶ春日は暮れずともよし」

今年の5月ご自宅で湯島時代の神学校の様子をインタビューしに伺った時、車椅子ながら尽きないお話をしてくださった。その中で神学校に行く端緒として、当時の立教大学のチャプレンに「子供に聖書の話をできるような仕事に就きたい」と告白すると「それなら神学校に行って学んだ方がよい」と言われたことを挙げておられた。その後、人生の多くの時間を子供たちに接するチャプレンとして過ごされ、晩年は本当に幼児に囲まれて、その初心を全うされた観がある。先生のお姿に接して良寛さんを思い出したのは故あることだと思った。

良寛の辞世の句が浮かぶ。

「うらを見せ、おもてを見せて
散るもみじ」

主に感謝

クリスマス特別インタビュー

ナザレ修女会
霊母　順修女

今回はナザレ修女会で長い間霊母として働かれておられる順（のぶ）修女から、お話しを伺った。

―　お生まれはどちらですか

順霊母　山形県米沢市で生まれ、3歳から12歳までは長井市に住んでいました。

―　その頃の思い出で特に印象に残っていることはありますか

順霊母　6歳と7歳の2年間、鼻の治療で仙台の伯母に世話になり、東北大学の皮膚科で治療を受けたことですね。

―　どのような家庭環境だったのでしょう

順霊母　父は中学の歴史教師で、祖母は神主の娘でしたから家にはお社があり、毎朝祝詞をあげていました。

母は旅館の女将で姉御肌の世話好きでしたから、家には家族以外にいつも書生や兄の友達など4人ぐらいがいて賑やかでした。しかし、私が13歳の時に亡くなりました。

―　子どもの頃はどんなお子さんでしたか

順霊母　皆にかわいがられて明るい子どもでした。小学校の頃、何故か分かりませんがいじめられていたようで、母に「いじめられるから学校に行きたくない」と言ったことがあります。

―　お仕事は何かなさったのですか

順霊母　私が13歳の時、母が肺ガンになり「あなたはこれから一人で生きていくのよ」と言い残し亡くなりました。その後米沢に戻り、母の代わりをしながら、女学校に通いました。専攻科を卒業後、学校の教師として短い間働いていましたが、突然姉が亡くなり、2歳と4歳の子どもを引き取り、育児を2年間しました。戦後、東北大学医学部付属助産婦学院に入学しました。この時は、ただただ一刻も早く、主婦兼母親の生活から逃げだそうと学費免除、宿舎有り、食費無料というところを探し、受験したら運良く入学できました。そこで看護婦、保健婦、助産婦の資格を取り、6年間岩手の大学病院で働きました。

―　教会に行くようになったきっかけは何でしょう

順霊母　女学校の頃、国語の先生と一人の友達が聖公会の信徒で、時折、信仰の話を聞かせてくれました。特に先生が話したハンセン病のダミアン神父の話は印象に残りました。先にも話したように姉が子どもを残して亡くなり、義兄も軍の輸送船に乗って家に居なかったので母親代わりをすることになりました。でもわずか18、19歳では子育てはわからず、つくづく人の子を育てるという大変さを実感しました。外に出る機会も友達と話す時間もない私は次第に寡黙になり、人嫌いになって家に閉じこもりがちになりました。そのような私を、長く働けるからという理由で教師を辞めて定時制の主事をしていた父が見かねて、同じ学校の教師だった宅間司祭（米沢聖ヨハネ教会牧師）に話したのでしょう。終戦の年のクリスマスに教会に誘っていただきました。でも子連れの上に全てに悲観的だった私は行く気になれませんでした。明けた正月に今度は女学校の頃からの友達が訪ねて来て「教会に行きましょう」と誘ってくれました。渋っている私を父が強く勧めるので子どもを連れて渋々出かけて行きました。私自身は進んで教会に行きたいという意思はなかったのですが、やはり土台を据えられていたのでしょうか。それから教会に小さい子どもを連れて通うようになりました。

―　洗礼を受けられたのはいつですか

順霊母　初めて迎えた受苦日に十字架に黒いリボンがかかっており、それに向かってひたすら義兄の復員を祈りました。すると8月に義兄が戦地から帰ってきたのです。その時は「私の祈りを聞いてくださった」と思い、とても嬉しかったです。なんの抵抗もなく勧められるままに12月に宅間司祭から洗礼を受け、一週間後に按手を受けました。

―　修女としての召命が与えられたきっかけなどお聞かせください

順霊母　私の祈りを叶えてくださった神様にご奉仕したいという気持ちが、だんだん強くなり、一生を捧げる思いで北海道のカトリックの修道院に行こうと考え、宅間司祭に相談しました。すると東京の白金三光町にあった聖公会のナザレ修道院を紹介されたんです。その時は3年間、教会生活をするように言われました。

―　白金にいらした頃の印象に残っていることなどはありますか

順霊母　修道院の奥で静かにお祈りだけの生活ができると思っていたのですが、翌年にナザレ幼稚園ができ、そこで働くよう言われました。まだ服従ということの本当の意味がわからなかった私は気が進まぬままに仕事をしており、いつも「この仕事を変えてください」と祈っておりました。終生誓願の前にも、晩祷の後、いつものとおり祈りましたが変わることはなく部屋に行こうと階段を上っているとき私は一切を捨てて神様に仕えるために来た、という誓願の服従を思い出しました。とその時、急に力が抜けてすべてを神様に委ねることだと気が付きました。その瞬間、なぜだかわかりませんが「幸せだな

あ」という思いが沸き上がりました。これが召命というのでしょうか。不思議な体験でした。

―　その後、霊母になられたのですが、その時のお気持ちはいかがでしたか

順霊母　沖縄とブラジルへの宣教から戻ると、その翌年の選挙で霊母に選出されました。修女には服従の誓いがあるため「出来ません」はありません。その場ですぐ就任式です。私は海外に出ていたので本院での経験が浅く何もわからずとても戸惑いました。ですから、まず「この重たい十字架をどうやって背負うのですか」とまた神様に苦情を言いました（笑）。でも私の一生は【この世に生を受けたときからわたしはあなたのもの】でありまさに【母の胎にいたときからあなたはわたしの神（詩22：10）、わたしはあなたのはしため】なのですから。

―　ナザレ修女会が大切にしていること、また目指していることは何でしょう

順霊母　主のみ跡に従うことです。つまり清貧、貞潔、服従の三誓願の意義をより深く祈り求め、何かをすることよりも、すべてを捨て無一物として神に満たされる生き方です。そのため謙遜に神を拝み教会と人々に仕えることを目指しています。

―　修女として今の時代や社会との関わりをどうお考えでしょうか

順霊母　直接、社会のための働きをすることもありますが、本分としては、現代の社会生活に疲れて訪れる人々を迎え、静かに共に祈り、み旨を待ち望むのが勤めだと思っています。

―　久々に新しい修女が誕生されましたが、彼女に望むことなどありますか

順霊母　歴史の中に残された先輩修道者の信仰を学び、どのような時代、瞬間にあっても揺らぐことのない修道の道を日々新たにされ、また強められ歩み進んで欲しいと望んでいます。

―　振り返って、今思うことはなんでしょう

順霊母　少子化による幼稚園の廃園や、三鷹への修道院の移転などの苦労もありましたが聖霊のお導きとたくさんの人の助けで乗り越えることができました。

用いられて霊母になって今は18年目、「足あと」の詩（パワーズ作）のように後で考えると必ず神様は助けて守っていてくださいます。私はいつも《いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい（1テサ5：16～18a》と唱えています。神様に生かされているので世間的な不安は感じませんし、歳をとったという感じもしていません。

これからもイエス様を見つめて走るだけです。イエス様の裁きを受けるのも怖いですがその前にペテロさんに「まだだめだ」って追い返されそうになったら「コケコッコー！」と鳴こうかと思っています（笑）。

―　これからも元気でお働きをお続けください。今日はどうも有り難うございました

（広報委員会）

秋の思索

司祭　池　星熙（ジ ソンヒ）

高くなっていく空を先に立たせ、秋が近づいている。秋が深まると葉っぱたちも落ちてしまい、山の飾らない風景を見るようになるはずだ。春の燦爛としていた新緑も夏の強烈な緑も秋の華やかな紅葉も何一つ山の本当の姿とはいえない。山はすべての華やかな色があせてしまう晩秋になってようやく本来の姿を現す。季節に合わせて美しい色合いを作り出す山は、実は地味な灰色なのである。

「地は混沌であって闇が深淵の面にあり」といったように創造時の色は地味だったに違いない。創造時の色に回帰する秋ともなると、目を乱す迷いから脱し、目に見えない根源的なものを考えるようになる。それゆえ秋は思索の季節だと言われるかもしれない。

老子は最高の善は水と同じだとした。水は万物に有益を与えながらも、争うことなく、地のように低いところに存在するもので「道」に近いと語った。低いところにとどまる「謙遜」と争うことない「寛容」が天地の摂理であり、自然摂理の中心概念である。これが聖書に現れたイエス・キリストの品性でもある。このような摂理に逆らうことこそがまさに全ての葛藤の種なのである。

社会と個人の葛藤を解消するためには、その根本を省みることだ。しばらく自分の欲を捨てて、内面にいる私は誰なのか、私がどうしてこの仕事をするか、その本質を省察しなければならない時だ。もし新しく人生を生きたい人がいれば、自分の中にある罪を悟って、悔い改めることだ。人生は短い。執着と葛藤の中で生きていて、晩秋に散ってしまう落ち葉のような人生の最期を迎えるのはあまりにもむなしくないのか。

（聖バルナバ教会　副牧師）

2014 大畑主教に聞く
私たちは イエスさまとともに 歩いているか

― 2014年はいろいろなことが大きく動いた年だったと思いますが、全体的なところからご感想をお聞かせください

主教 海外に出ることも何度かありました。最初のところより9月以降に起こったことの方が自分の中でインパクトがあるのでそこの印象から話をさせていただくと韓日宣教協働30周年で済州島に行き、また、エルサレム教区に行くということなどがありました。済州島のものすごくきれいな空港や、テル・アビブ空港からエルサレムへと向かう道筋の繁栄とがすごくつながって見えました。済州島の飛行場のごく隣に四・三事件（1948年）死刑場があったのだそうです。拡張工事をするたびにご遺骨が出てくる。また、パレスチナのことで言えばイスラエル政府がパレスチナの人々を追い出して行き、ベドウィンの人々の囲い込みをしていく。だからこそインフラが整備されきれいなビルが立ち上がっている。

繁栄の陰に、そして、私たちが「平和だ、平和だ」と言っている陰に悲しんでいる人、苦しんでいる人が居て、そのような時に「イエスさまはどこにいらっしゃるのだろうか？」ということを考えさせる年だったと思います。そして、私たちがイエスさまと共に歩む人になっていかなければならないなというのが全体の感想です。

― 今年は教区再編成準備室も立ち上がりました

主教 現状把握のために、東京教区の人たちが何を考えどこを目指そうとしているのかを知るために自由筆記のものとしました。予想以上の回答があり、丁寧に読み込むのに時間がかかっています。ですが東京教区の進む道を真剣に考えている人がこんなにもいるということが驚きでもあったし、希望です。

― 今後どのようなヴィジョンを描くのか、リーダーシップも求められています

主教 いろいろな形のリーダーシップのとり方があると思います。私は先頭に立って「ついてこい！」的なタイプではないと思っています。だから時間もかかります。対話を丁寧に進めながらすることが大切と思っています。

それは単に東京教区だけではなく海外との関わりも大切にしていかなければと思います。大韓聖公会との関わりで言えばかつて東京教区との交わりの中で蔚山の教会形成がなされていきました。

夢を語れば、東京教区にある33すべての教会が毎日曜日10時半に聖餐式をし、日曜学校をし、というよりもきわめて特色のある教会をどんどん作ってくれたらいいなと思います。教区再編というと「後ろ向きに教会なくなってしまうのではないか」と思われがちですが、そうではなくて住んでいる地域の人たちとどうやって生きていくのか、何が必要で何をすればよいのかを真剣に考えることができるような特色のある教会を作って行く必要があります。メリーランドやロス・アンジェルスで野宿をしている人のための「スープキッチン」を持つ教会に出会いました。もちろん教会ですので礼拝はするのですが、そこで温かいものが食べられるセンターを作っています。また、韓国語会衆のための教会、社会宣教や教育のためのセンターとしての役割など、韓国語会衆のための教会それぞれに機能を特化した教会ができるのではないでしょうか。

― 大きな変化を受け入れる土壌が必要ですね。聖職者もなぜ変化しなければならなければならないのかを理解して答えられなければならない

主教 そのために聖職者は霊的にしっかりとしていなければいけない。霊性を養う時と学びの時をきちんと持っていてほしい。ここ10年くらい負のスパイラルに落ち込んでいて、あれもこれも忙しくて、どうしようもない、見直す時間もないという現状が起きている。休みを取り自分自身を見つめ直すことを含めて、自分が神様に召されているということ、何をすべきかということの明確な裏付け、神学的な裏付けを共に聖書を学び祈るなかで培っていかなければいけないと思います。そのためには信徒にも協力して欲しいと思います。

― 聖職の黙想会は今年初めてのものでした

主教 まず私たちが霊的に強められていくという作業をきちんとしていかなければ枯渇してしまいます。これからも年一回していきたいと思っています。

大きな変化をもたらすためには信徒の心の向きも変えていかなければならない。聖職たちが霊的に強められることを通して、信徒の心の向きが変わっていくのだと思います。

東京教区が歩む道筋は、イエスさまの通られた道を歩むこと以外にありません。そのためにも変化することをおそれないでほしいと思います。

（広報委員会）

私たちの教会［１５］

ようこそ東京聖マリア教会へ

『もっと教会を行きやすくする本』を参考に、消極的伝道をしよう。それが東京聖マリア教会（以下、聖マリア教会）90周年行事の一つです。

教会には見えない壁が沢山あるようです。慣れてしまうと壁の存在を忘れてしまいがちですが、沢山の壁をもう一度見直して、壁そのものをなくしましょう、という働きです。

まず陪餐の時「腕を胸の前でクロスさせて待つ」、小さな教会で数名の新来者にわざわざポーズを取らせることは不要ではないかと。新来者からも「恥ずかしい」と。やめました。献金袋の導入も考えています。信施金の献金袋、お金を入れられなくても安心して礼拝に出られる献金袋。感謝・賛美の献金ですが、わけもわからないまま「献金を」と言われる緊張感をいくらかでも緩和できるように、「ご用意のない方はこのままお入れ下さい」と。

1年11回の教会委員会で考え検討した事柄はまだ二つです。たくさんの事を考え、本当に壁なのだろうか、必要な事なのだろうか、多くの時間と勉強を重ねて静かに丁寧に変化をしています。これは「私の教会」から「他者への教会」への大きな変化です。その変化を気負いこまずに実行していこうというのが消極的伝道というわけです。

この10年間、聖マリア教会では辛い出来事もあり、教会から離れてしまい、未だ帰ってこられない信徒さんもあります。乗り越えることも出来なければ、解決もできないまま、神さまに祈ることしか出来ない今日を生きています。

聖マリア教会は１９８０年代にバリアフリーを目指して、フルフラットの礼拝堂、自動ドアの設置、車いすで利用出来るトイレなどを作りました。そのときももちろん「他者への教会」を目指していたと思います。そして、今もまた「他者への教会」を目指して礼拝を守っています。いずれ「他者」が神さまに出会い、洗礼を受けキリストを信じる仲間に加わってくれる希望を胸に、いつまでも完成のない「他者への教会」を目指して、生きている教会を作っている聖マリア教会です。

（ルカ　宮田　ユウゾウ）

《信徒リレーエッセイ》

杯のワイン

神愛教会　渡辺　定夫

信徒奉事者として聖杯奉持の役を仰せつかっている。ほとんどの場合、杯には必要な量に余りあるワインが入っているわけであるが、聖餐では皆さんほんの少しだけを押し頂くように受けておられる。杯からほんの少しだけを飲む、それも唇にワインがつくかつかないか程度の方もおられる。むろんお酒であるから苦手な方もおられよう。セルフ＝インティンクションを選ぶ方にはそれなりの理由がありそうだ。

そこで私がいつも思うことは、しっかりワインをいただいて欲しいということである。たくさん飲んで！ということではない。礼拝では大きな声で賛美を歌い、はっきりと祈りの言葉を唱える、と旧友が言っていたことを思い出すが、パンとワインをいただくことも同様に思う。その友は本当にいつも大きな声で礼拝していたが、さてワインのほうはどうであったか。私としては杯をしっかりと受けていただくよう気を配るのみである。

後期信徒黙想会

聖職養成委員長　吉松英美

聖職養成委員会主催の後期信徒黙想会が10月12、13日の両日、東京・練馬のイエズス会「黙想の家」で開かれ、一般参加16人に聖職養成委員等を加えた計26人が参加した。

講師は大阪教区の大西修主教。聖職の仕事の実際を通して聖職への道に進む人たちに励ましと希望を与えたいというのが、今年のテーマ「牧師の仕事―生活・祈り・喜び」である。主教の講話の概要は以下の通りである。

1、他者のために祈る事が大事

祖父、父ともに司祭という聖職者の家に生まれた。今、三代続いている牧師がどれほどいるだろうか。聖公会は家族的な面が強いというが、それがパワーになっているかどうか。生まれた時から家と教会が一緒で、礼拝に出ることに何の疑問もなかった。それが大学に入って、寮から、離れたところにある教会へ行くようになって、はじめて教会へ来る人の気持ちが分かった。

祖父は祈りが好きな人であった。代祷になると、延々と続いた。祈りとは、他者のために祈るものであることを祖父から学んだ。祈りは牧師の大切な仕事である。イエス様の祈りは、早朝、静かな場所、人のいないところなど神と対峙する場所が多い。十字架の苦しみの中で祈る。そういう時だからこそ、神に祈る。普通は、「こんな苦しい時に祈りなど出来るか」と思うが、その時こそ祈りの時である。ある時から、先生と呼ばれるようになった。そうすると、今度は大西さんと呼ばれた時に違和感を感じる。そういう時こそ、「要注意」だ。相手がどういう気持ちでそう呼んでいるのか、そう呼ばれた時、それをどう受けとめるかが大事だ。イエス様はいつも相手の気持ちや立場に立って考えていた。だからこそ、そこに赦しと愛が生まれる。

2、召命の基準と世間の常識

聖書には、召命についての記事が沢山出てくる。アブラハムはかなり高齢になってから召命を受けた。モーセは「自分は口べたで、期待に応えうるような器ではありません」といって、一度は辞退した。彼は人を殺してもいる。

エリヤは、母の胎内にいる時から主の目に留まっていた。ダビデに至っては、部下を殺してまでして、その妻を娶っている。にもかかわらず召されている。

召命の基準は性別、年齢、地位、人格などにおいて、世間の常識を越えている。完全な人であるより、神と真っ直ぐ向きあえる人（それが義の人）を選んでいる。

3、出会いの中で生かされる喜び

聖職に召されることは恐ろしいことだ。しかし、そこにこそ聖職の喜びがある。だが、辞めようと思ったこともあった。長男を亡くして、人を見る目が大きく変えられた。聖職としての働きにもっと真剣に関わるべきだという気持ちになった。イエスの生き方を頭では分かっていたが、心で受け容れていなかった。信徒の気持ちをどこまで受け容れてきたか。

牧師をしっかりと支え重荷を共に担ってくれる信徒がいることを知った時、牧師としての励みと喜びを感じる。

牧師は言葉を慎むことも必要だ。自分の言葉に傷ついて教会を離れていった人がいたかもしれない。そんな時、牧師として召された者は、相手のせいではなく、自分の課題としてそれを受けとめなければならない。牧師の喜びは、自分に気づかされつつ、人々との出会いの中で生かされることだ。子どもの頃、見知らぬ人が家に出入りし、泊まっていた。祖父や父は、主からそういうことが出来るようにしてもらっていることを喜んでいた。

・深く動かされた参加者

参加者からは、「大西主教の誠実で真摯な話に深い感銘を受けた」、「牧師は『語り手』であることを実感した」、「牧師の仕事を楽しかったといえる聖公会はすばらしい」、「自らの生き方を誠実に話してくれた、その人柄に感動した」などの声が寄せられた。

この信徒黙想会は、4年を経過して、形式、内容ともに整ってきたので、来年度からは名称も「召命黙想会」と改めて開催する。

編集後記

以前、福澤先生の巻頭言原稿が、編集日当日になっても届かず、電話すると「ごめん、忘れてた」と言って待つこと30分、FAXで送られた文章はすぐれた内容であったことを思い出す。師の魂、安らかに憩わんことを。

◇　◇

次回　大斎節号

２０１５年２月15日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア（十六）

1．お祈りは大きな声で

子ども「（大きな声で）神さま、クリスマスのプレゼントにはゲームをください。アーメン」

母親「そんな大きな声を出さなくても、神さまは耳が遠いわけじゃ　ありませんからちゃんと聞こえますよ」

子ども「だって神さまには聞こえるかもしれないけど、おじいちゃんには聞こえないかもしれないじゃない」

2．弱　点

牧師「士師の一人で怪力のサムソンは、デリラに恋をして自分の弱点を話したため、ペリシテ人に捕まりひどい目にあわされたのです」

信徒「なるほど、教訓としては、女性に弱みを握られると、痛い目に合うということですね」

3．思い煩うな

信徒A「あの人は、イエス様の言葉どおり“何を食べようか、何を着ようか”まったく思い煩わないらしいよ」

信徒B「そうか、でもその分、奥さんはそのことで、だいぶ思い煩っているだろうなあ」